RESEARCH REPORT 1

四日市公害を原点に、未来へ・アジアへ

「YOKKAICHI STUDIES」
Toward The Future and Asia

人文学部教授
朴 恵淑

ぱくけいしゅく
理学博士
専門分野は環境地理学、
自然地理学（気候学）、生気象学
1954年生まれ
http://gaea.human.mie-u.ac.jp/~park/

人間学・未来学・環境教育学・アジア学としての「四日市学」

～四日市公害の現代的再評価とアジアの国際環境協力～

三重大学が位置している地域圏の四日市地域は、四日市喘息で知られる大気汚染による公害で苦しんだ地域であった。大気や水環境の破壊だけでなく、人間を含む生態系の命が奪われ、社会システムの崩壊にまで及んだ負の遺産である四日市公害に対して、三重大学の研究者は住民と一体となって格闘してきた。そのような成果が1972年の四日市公害訴訟の勝訴判決となって現れた。社会システムが多様化・グローバル化していく中で、個人が果たす役割には限界が生じるため、三重県唯一の総合大学として地域圏大学を標榜している三重大学に地域貢献に大きな役割を果たすことが要求されている。

三重大学人文学部は2001年より、学部を超えた研究者グループによる人文・社会科学及び自然科学・医学の成果を統合した学際的・総合環境学研究（Integrated Environmental Science）の中心的役割を担ってきた。四日市公害を負の遺産から正の遺産として直視しつつも、快適な環境都市をめざす自治体を含む地域・住民と協働できる認識共同体（Epistemic Community）を構築し、将来のまちづくりへ寄与するものと位置づけられた「四日市学」（Yokkaichi Studies）を構築した。「四日市学」は、四日市公害問題について「学際的・総合環境学的」側面から現代的再評価を行う学問であり、行政や市民、企業の各セクターを横断的に繋げる「認識共同体」を創るツールとなる。その中間成果報告として、2004年1月に『環境快適都市をめざして――四日市公害からの提言（上野達彦・朴恵淑共編、中央法規、342頁）』を出版した。

「四日市学」は次の4つの側面からアプローチできる学問である。(1) 四日市公害は解決済みの過去の問題ではなく、現在進行型として顕

1

2

3

1. 四日市公害から学ぶ「四日市学」開講（2004.4.15）総合科目
2. 四日市公害から学ぶ「四日市学」（2004.5.6）
3. 第4回国際環境シンポジウム：四日市学（2004.7.24）三重大学講堂小ホール

在している環境問題であり、自然は誰のものか、命の尊厳を問う「人間学」(Human Science)である。(2)過去の公害から未来の環境保全都市へ転換をはかるため、環境と経済との持続可能な社会システムを提案する「未来学」(Future Science)である。(3) 四日市公害を経験していない次世代への「環境教育学」(Environmental Education)の教材開発、問題解決型・体験型教育のツールとなる。(4) 環境の世紀・アジアの世紀といわれる21世紀において、東アジアの韓国や中国、極東ロシアや東南アジアの大規模産業団地で見られる、かつて日本の4大公害の複合型ともいえる公害問題において、四日市公害の教訓を活かした国際環境協力を行う「アジア学」(Asian Science) として位置付けられる。

(1)人間学としての「四日市学」
Yokkaichi Studies as Human Science

公害の被害者が社会的に弱い立場にある場合は全体的な公益性優先政策によりほとんど守られなかった。このように、公害問題は公共性(公益性)をめぐる国のあり方に大きく関係している。社会的弱者である被害者の地域住民と加害者である企業との不均衡、または不正義な社会システムから被害者の生存権を守る試みとして、四日市公害問題の環境倫理(正義)(Environmental Ethics; Justice)的考察を行っている。

(2)未来学としての「四日市学」
Yokkaichi Studies as Future Science

大気汚染のメカニズムを解明するための気象・気候学、地形学、GIS(地理情報システム)などの自然科学及び人間を含む生態系への大気汚染による影響を探る公衆衛生学、生物学、大気汚染規制の効果的な環境対策、環境と開発とのバランスの上になりたつ産業や企業の取り組み、ライフ・スタイルの改善、環境教育の充実など、人文社会科学を横断的に繋ぐ、学際的・総合環境学的な取組が行われている。また、四日市コンビナートの老朽化と共にコンビナート時代の終焉を告げる時に、四日市がどのように再生するのかを提案できる学問でもある。

(3)環境教育学としての「四日市学」
Yokkaichi Studies as Environmental Education

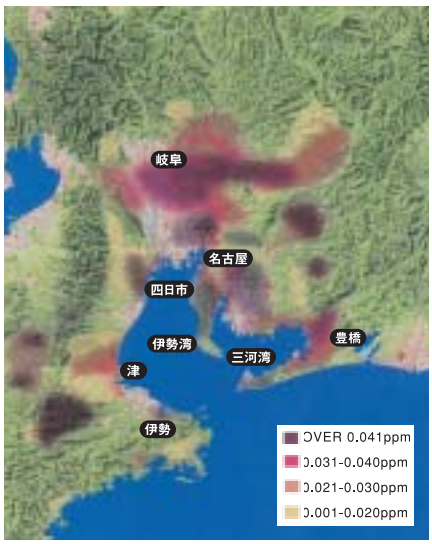
「四日市学」の講義が、2004年4月から三重大学の共通教育における総合教育のカリキュラムとして開講された(写真1)。講師は全学からはもちろんのこと、他大学の教員、三重県や四日市市の行政、国際環境技術移転研究センター(ICETT)及び、元原告、公害問題の語り部、企業側、水俣病研究の権威など、様々な分野からの講師が担当している。四日市学の講義の内容の一端を紹介すると、次のようである。

四日市公害から四日市学へ(上野・朴)、4大公害との接点(上野)、四日市公害の記録・語り部(野田・澤井)、大気環境教育(朴)、文学(山本)、人権・憲法(寺川)、四日市コンビナートの地域経済的影響(鹿嶋)、国際環境協力(倉)、企業活動・ライフスタイル(妹尾)、環境倫理的考察(高橋)、疫学的研究(横山)、市民社会(豊島)、環境政策(長谷川)、韓国の環境問題(朴)、中国の環境問題(福田)、国際法(西村)、四日市公害資料館のあり方(石原)、宗教(中川)、新潟水俣病(野中)、ポーラスコンクリートにまつわる話(畑中)、地域経済的展望(雨宮)、水俣病(原田)

環境教育学の根底には、環境倫理(正義)側面から接近する人間学的考察がある。四日市喘息患者が社会的弱者であることを明確にし、彼らが不正義な社会システムから生み出された被害者としてその生存権を守ることによって、正義の回復をはかるという方法論的考察である。四日市公害を体験していない、学生に問題解決型・間接体験を通じた、四日市公害の過去・現在を理解し、未来の快適な環境都市をめざす地域圏に貢献するための環境教育学である。

(4)アジア学としての「四日市学」
Yokkaichi Studies as Asian Science

「四日市学」の中核をなす総合環境学は、狭い意味での地域圏に限定されるものでもない。環境という概念はより広域的で、グローバルなものである。「四日市学」は、このことも十分に認識し、日本のさまざまな公害発生地、さらには韓国、中国、極東ロシアなどの東アジア及びタイ、マレーシア、インドネシアなどの東南アジアを視野に入れた、公害発生地の自治体や住民との連携や研究協力が不可欠であるという展望も持っている。毎年国際環境シンポジウムを開催しており、2004年7月24日には第4回国際環境新シンポジウムを開催した(写真2)。「四日市学」は、近未来において快適環境都市をめざしている四日市に「四日市—アジア持続可能な環境センター」(Yokkaichi-Asia Sustainable Environmental Center)を構築することを提案し、東アジアや東南アジアとの国際環境協力のあり方を探る学問である。



伊勢湾周辺地域のNO_2濃度の状況(2002.3.13)
2002年6月に日韓共催で開催された「FIFAワールドカップ2002」に際して、日韓の4万人の小中高大学生・市民・研究者によって大気汚染(NO_2)測定が行われた。日本の四日市を中心とした伊勢湾周辺、東京を中心とした東京湾および韓国のソウル、釜山、仁川など10都市において2002年3月と6月に実施された。伊勢湾周辺地域の2002年3月13日のNO_2濃度は、四日市周辺、津周辺、伊賀地域、名古屋周辺や内陸山間部まで高濃度地域が広がっている。四日市公害をもたらした大気汚染は、40年を過ぎた現在においても深刻な環境問題となっている。

4

5

4. 四日市コンビナートの現状(2004.7.25)

5. 上野達彦・朴 恵淑共編『環境快適都市をめざして——四日市公害からの提言』中央法規、2004年1月, 342頁